

アートで人と人をつなぐ

原 逆に豊中に足りないものとか、こういうものがあつたらもつといいのにといいものがあれば。

富長 アートは観る人と創る人だけではなく、紹介したり、サポートしたりする人など、様々な役割や視点をもつ人がいて初めて豊かなものになっていくと思います。豊中の魅力を一言で言いますと「人」。目をつぶって考えても、景色やモノではなく、「人」が浮かびます。アートに関しても、豊中は様々な視点でアートに関わる人がたくさんいると思います。

原 市民会館のおみくり展のような地域に根ざしたアートの取り組みがもつと増えていけば、人と人がつながっていくのかもしれないですね。最近、各地で芸術祭が盛んに行われていますが、パターン化している傾向も感じます。地域のいろんな人や資源が混ざり合って何かできたら、予定調和的でなく、その地域の歴史や人の姿が浮かび上がってくるのではないのでしょうか。

伊達 アートが地域性を大事にし始めた時点で、ひとつの分野というより、例えば体育と書道をアートがつなぐみたいなのが、接着剤として働くという考え方が必要だと思います。



ハートのような形の石を世界中のいろいろな場所に持って行って、その地域の人たちと磨く「Love Stone Project」は、世界90か所で9000人以上の人が参加（平成27年12月現在。豊中では、第七中学校や「原田しるあど館」で子どもたちが磨きました。



亀谷 地域の歴史的なことを知るとおもしろい。関心のある人も多いと思います。昔はこのあたりは池だったとか、こんなことがあつたとか、いろいろな話を聞くと、土地に対する見方が変わります。地域に根ざしたアートというのは、こうした関心を増幅する仕掛けのようなものではないでしょうか。

伊達 「まち歩き」イベントにお金を払ってでも参加する人が多いのは、一緒に歩く人によって目線がまるで変わるから。それがまち歩きのおもしろいところ。

片山 目線を提供してもらおうというのがポイント。同じものを見ているのに、こんな見方もあるのかと気づかされる。



視点が変わることで現れる豊かな感情

原 みなさんの創作活動を通じて、人の気持ちとか、人と人の関わり方に何か変化が起きたという体験や気づきはありますか。

富長 石を磨く作業をまちなかに持ち出してみると、予想もしないことが起こります。ある小学校で、子どもたちと石磨きをしたときのこと。1か月かけて全員で磨き終えた後に、クラスの一人の子がお父さんと一緒に登山に行つて亡くなる事故が起きました。その子はとても熱心に石磨きをしていたのですが、クラスメイトたちは彼が亡くなったと聞いて、彼が磨いた石をずっと撫でていたそうです。亡くなった友だちがそこに居て、実際に彼に触るみたいなのに、彼が磨いた石をみんな触っているということに驚き、人とアートの関わりが見えたように感じました。石をみなさんと一緒に磨くことで、一番変わったのは、実は僕かもしれません。

亀谷 漆作品でも、お芝居の中で、笛の奏者やダンサーに、作品のイメージをくみ取ったパフォーマンスをしてもらいながら作品を鑑賞すると、通常の鑑賞とは違った見え方や感じ方が立ち上ってきて、作品の新たな一面を発見できました。

片山 僕自身がギャラリーの運営を通して、常に新しい感覚や見方など、自分とは違った



片山さんのギャラリーでは、「豊中市立市民会館おみくり展のおみくり展」として、立体文字が大阪市内を観光するという設定で撮影した写真を展示。



伊達伸明さんが、市民会館の建物の廃材を使ったウクレレ制作を依頼されたことをきっかけに、自身も愛着のある市民会館を味わいつくす企画として実現。市民から思い出のエピソードを募集する展示イベント「おしえて！あの日の市民会館」を企画として、「部材から人々の営みを見る」「証言から45年の足跡をたどる」「会館の立体文字を味わう」の3つのテーマで構成されました。

視点を作家からいただいたている。そういう作家ならではの感覚を、いろんな形で多くの人たちにも伝えていきたいと思っています。

伊達 取り壊される建物からウクレレをつくる時、僕はあえて住んでいた人がよく触つて汚れていたりする場所の廃材を選びます。塗料では絶対作れないような不思議なあめ色になった手すりとか、長い間座っていたせいで剥げてきた床板とか。住んでいた人の反応は人に見せたくないマイナスの部分と感じ、恥ずかしがる人が多いのですが、それをウクレレにしてお返しすると、自分の肌身に近く、暮らしの思い出が表れたものとしてとても懐かしく感じられます。作家冥利に尽きる瞬間です。

原 もともと潜在的にあつたかもしれない引き出しを開いて回つたみたいな感じですね。

伊達 そうですね。もう無くなつてもいいと思つていたものが、実はすごく愛着を感じるというようにすることがいっぱいありますね。

原 多くの人が固定化した見方や既成概念にとらわれがちですが、アートはそこに揺さぶりをかけてくれます。出来事としてのアートを、あちこちに点在させたり、そのプロセスに介入する人たちが増えれば、もつと豊中がおもしろくなりそうですね。



漆作品を主役にしたパフォーマンスの一場面。